

BOOK TRAIN

ブックトレイン



『マスクと黒板』

こくばん
『マスクと黒板』
はまの きょうこ さく
浜野 京子/作
こうだんしゃ
講談社

きゅうこうあ しょうこうぐち うえの ちゅう せいと め
休校明けの昇降口で植野中の生徒たちが目にした
のは、小さな黒板に描かれた「コロナに負けるな！」の
文字と、残雪の富士と桜を描いた「黒板アート」だっ
た。目立つことが大嫌いな美術部員の立花輝は「植
中のバンクシー」が黒板に込めた思いを知り、自分で
も驚きのある計画を立てる！コロナ禍の閉塞感に
抗う生徒たちを描いた、今こそ読んでほしい1冊。

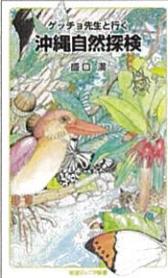


『さばの缶づめ、
うちゅう
宇宙へいく』
さばかいどう うちゅう
鯖街道を宇宙へつなげた高校生たち
こさか やすゆき ちよ
小坂 康之/著
はやし きみよ ちよ
林 公代/著
イースト・プレス

おも とうじょうじんぶつ れきだい おばますいさんこうこうせい わか
主な登場人物たちは歴代の小浜水産高校生+若
さこうこうせい う ちゅうしょくつく ひとこと
狭高校生。「宇宙食、作れるんちゃう？」の一言か
はじ おも ぶんか さいそくかんぱい じ もどみっちゃん
ら始まった思いつきが、文化祭即完売地元密着大
にん き おばまこうこうとくせい かん う ちゅう う あ はじ
人気小浜高校特製サバ缶を宇宙に打ち上げる始
まりになるとは！夢があるから行動するのではなく、
たの むり こうどう ゆめ はぐく
楽しく無理なく行動しているうちに夢は育まれるの
かも知れない…。そう思えてくるノンフィクションだ。



「BOOK TRAIN」のバックナンバーは、



『ゲッチョ先生と行く
おきなわしせんたんけん
沖縄自然探検』

せんせい
盛口 満/著
いわなみしょてん
岩波書店

どうきょう す たいよう きょうだい
東京に住むあかりと太陽の姉弟が、おじさんに案内
せってい か せんせい おきなわんけんほん
される設定で書かれたゲッチョ先生の沖縄探検本。
ゆうきゅう れきし ちりてきどくちょう も おきなわ しまじま
悠久の歴史や地理的特徴を持つ沖縄の島々には、
こせいてき ぶんか う つ
個性的な文化が受け継がれている。それらすべて
しまどくじ しじん い もの
が、島独自の自然と生き物たちにつながっていること
き かんこうち はず しまじま めぐ
に気づかせてくれる。観光地をあえて外した島々を巡
たび し おきなわ みりょく あじ
る旅で、まだ知らぬ沖縄の魅力をたっぷり味わおう。



千代田区立図書館ホームページに掲載しています。

『カaimanのクロ』

ひととくらしたワニ

マリア・エウヘニア・マンリケ/文

ラモン・パリス/絵

どろき しづか/訳

ふくいんかんしょてん
福音館書店



宝石商を営むファオロは、手のひらにのるほどの小さなあかちゃんカaiman(ワニの一種)を引き取った。カaimanは「クロ」と名付けられ、いつもファオロのそばにいた。すぐにまちの人気者となり、人になついたクロは、やがて体長3メートルにも成長する。しかし悲しい別れが近づいていた。ワニと人間の友情の美しさが胸を打つ、ベネズエラであった本当の話。

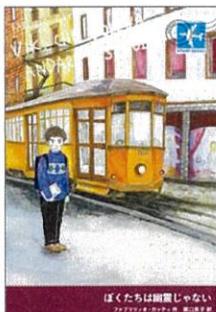


『ぼくたちは幽霊じゃない』

ファブリツィオ・ガッティ/作

関口 英子/訳

岩波書店



アルバニアに住むヴィキの家族は、大金を払って長い時間バスやボートを乗り継ぎ、命がけで父親が待つイタリアへと渡った。ところが、豊かな生活を夢見ていた家族を待っていたのは、息をひそめて暮らす不法滞在者としての生活だった。新聞連載の体験談をもとに作られた物語。希望を持ち、厳しい生活の乗り越えようとする家族の切実さが伝わってくる。



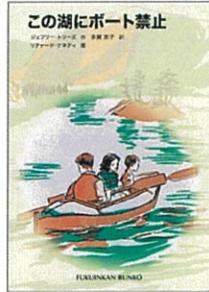
『この湖にボート禁止』

ジェフリー・トリーズ/作

リチャード・ケネディ/画

多賀 京子/訳

ふくいんかんしょてん
福音館書店



イギリス湖水地方の山荘に越してきたビルとスーザン兄妹。早速、近くの湖にボートでこぎ出だが、地主のアルフレッド卿から、「ボートは禁止だ」と告げられる。どうも不審な様子の地主の行動…。この時から学校の友人や校長先生を巻き込んで、ビル達4人の大活躍がはじまる。彼らのピンチの連続に、イギリスの歴史もからみ、事件は意外な方向へと展開していく。



『メイドイン十四歳』

じゅうよんさい

十四歳

石川 宏千花/著

講談社



優等生の藍堂はクラスの「中立国」。ある日、担任から少し特徴があるという転入生のお世話係を頼まれるが、目の前に現れたのは、全身包帯ぐる巻きの自称「透明人間」。彼を発端とするイジりに巻き込まれた藍堂は、去年の担任ゴマちゃん先生や秘密で通う釣り堀のちょっと変わった大人たちに支えながら、自分の内面と向き合っていく。

